

個の学びの質を高める授業づくり － 協同的探究学習による「わかる学力」の形成 －

藤村宣之（東京大学）

キーワード：協同、探究、リテラシー、「わかる学力」、「できる学力」

近年、OECDによる学習到達度調査（PISA）のような国際比較調査や全国学力・学習状況調査にみられるように、子どもの学力やリテラシー（学校教育で獲得した知識やスキルを日常場面等で活用する力）が話題になっている。そこでは、各国の順位や得点などに注目されることが多いが、各調査問題に含まれる思考プロセスと正答率の関係を認知心理学の視点から分析すると、日本の子どもには、手続き的知識・スキルを適用して定型的問題（解法や解、解釈などが一つに定まる問題）を解決する力（ここでは「できる学力」と表現する）の水準は高いが、多様な知識を関連づけて思考プロセスを表現し、概念的理解を必要とする非定型的問題（多様な解や解法、解釈などが可能な問題）を解決する力（ここでは「わかる学力」と表現する）の水準は相対的に低いという特徴が学年・教科を越えて一貫してみられる。また非定型的記述問題に対する無答率の高さから、日本の子どもには「暗記・再生」型の学習観が強く、「理解・思考」型の学習観の形成が不十分であるという傾向もうかがえる。

「わかる学力」の形成（特に概念的理解の深化）には、多様な知識を関連づけることによる知識構造の精緻化や再構造化が重要となる。そのための学習方法として、概念発達や自己説明に関する研究の知見からは、多様な思考が可能な非定型的問題に対して一人一人の子どもが知識を関連づけて説明を試みること（個別探究）が有効であると考えられる。また、他者とともに学ぶという意味での協同過程に関する研究の知見からは、他者は、聞

き手（他者がいることによる説明の精緻化）、話し手（他者から新たな情報を得ることによる知識の精緻化）、知識の協同構築の相手（自他による新たな認知的枠組みの構成）としての意義を有するため、多様な思考を関連づける、他者との協同過程（協同探究）の組織も有効であると考えられる。

以上の背景のもとで、「わかる学力」を高めるための、個別探究と協同探究を重視した学習方法が「協同的探究学習」と名づけられ、小学校・中学校・高校の教員と共同で開発と検証が進められてきている（藤村、2012 など）。その授業デザインとしての特徴は、①子どもの多様な思考を引き出すための非定型的問題（導入問題）の設定、②その問題に対して各個人が自身の思考プロセスを記述する個別探究の時間の組織、③個別探究で考案された多様な考えをクラスで検討して関連づけていく協同探究場面の設定、④協同探究場面で関連づけられた多様な考えを活用して、各個人がより発展的な非定型的問題（展開問題）に取り組むことで教材の本質に迫る、再度の個別探究の時間の組織にまとめられる。

各教科における協同的探究学習の心理学的実践研究では、授業のプロセスとして、子どもの多様な考えが活性化され関連づけられることでクラス集団としての思考が高まること、授業の効果として、一人一人の子どもの「わかる学力」のうちの思考プロセスの表現が急速に高まること、各個人の「わかる学力」のうちの概念的理解の深化や、「理解・思考」型学習観への変容が緩やかに進行することなど、個の学びの質の高まりが示されている。

参考文献

藤村宣之（2012）『数学的・科学的リテラシーの心理学—子どもの学力はどう高まるか—』

有斐閣

本文おわり